21 世紀のホイットマン
『<帝国>』・9.11 からトランプ政権まで

川崎浩太郎

はじめに

「現在」の境界を世紀転換期におくとするならば、同時多発テロ、イラク戦争、リーマンショック、トランプ政権誕生、コロナ禍、ウクライナやパレスチナでの戦争等々様々な出来事が去来する。21 世紀以降の様々な出来事や国際的な枠組みの激変は、ホイットマンの読まれ方にどのような影響を及ぼしてきただろうか。本発表は、民主主義の危機が喧伝される現代社会におけるホイットマン受容を三つの観点から広く概観する。

1. "I chant the new empire,":ホイットマンと『<帝国>』

ゼロ年代に続けざまに上梓された Antonio Negri と Michael Hardt の帝国三部作は『草の葉』を参照しているだけでなく、『草の葉』の読まれ方自体にも大きな影響を及ぼした。20 世紀末の批評がホイットマンの植民地主義や帝国主義的態度をポストコロニアルな視点から批判的に論じる傾向があった一方で、『<帝国>』以降は、"Passage to India"や"Years of the Modern"などの詩篇が、国民国家を形作ってきた境界線が解体した世界を予言した作品として好意的に扱われるようになった。ネグリらとは違ってはるかにユートピア的ではあるものの、運河、鉄道、電信などの輸送やコミュニケーション・テクノロジーによって地球が一つに結びつけられ、人種、階級、国家という枠組みを超えて世界市民が共働するというホイットマンのヴィジョンは、<帝国>以降のグローバル民主主義の到来を予期するような側面を含んでいたからだ。

またネグリらは『コモンウェルス』において、マルティチュードの革命において、他者に対する無分別なホイットマン的愛の重要性について述べている(289–91)。ネグリらが例に挙げるホイットマンの愛とは、"Song of Myself"や"Crossing Brooklyn Ferry"のような詩に顕著に見られる様々な差異を内包したマルティチュード同士の、「他者」に対する無分別、無差別的な共感に基づく愛であり、同一性に基づく排他的な愛とは明確に区別される概念である。この共感に関して、かつて D. H. Lawrence は、ホイットマンが没入と自己犠牲に基づくキリストやパウロの慈愛を共感と混同したと批判したが、近年の著書においてニューマテリアリストの Jane Bennett は、ホイットマンの共感の形態に新たな価値を見いだし、自己同一化に基づかない、より物質的で無分別な共感の性質を『草の葉』から読み取っている(616)。単なる感情的な自己同一化に基づいた共感を超越した、こうした無分別なホイットマンの共感の特質は、ネグリらのいう「愛」やマルティチュードの概念とも軌を一にしており、<帝国>や政治イデオロギーによって分断された現代社会においても有効な示唆となりうるだろう。

2. "They shall fully enjoy materialism and the sight of products," :TV コマーシャルにおけるホイットマン

"The proof of the poet is that his country absorbs him as affectionately as he has absorbed it."と初版の序文で宣言したホイットマンが、急激に拡大した文学市場において『草の葉』の売上を伸ばすために、匿名、偽名での書評、誇大広告などを含め、パブリックイメージの形成やセルフブランディングに積極的に関与したことはよく知られている。こうしたホイットマンと商品との親和性に呼応するかのように、これまで様々な企業がホイットマンの詩を引用したテレビコマーシャルを制作してきたが、今回は Levi Strauss 社の CM を取り上げ、『草の葉』のテクストの振る舞いについて確認する。イラク戦争、ハリケーンカトリーナ、リーマンショック等を経た 2009 年のこの CM は、"Pioneers! O Pioneers!"と"America"の二編の詩を引用している。CM である以上当然のことであるが、たとえば『反逆の神話』が指摘するような類のホイットマンの反逆者的態度が、自らが対抗する対象である消費主義をむしろ後押ししている点はこれらの CM にも当然見受けられるが、引用される『草の葉』の詩行は、同時にこれらの CM の欺瞞性も暴いている。リーマンショックやハリケーン・カトリーナによってもっとも大きな被害を被ったのが、マイノリティの貧困層であったという事実を考えれば、"All I need is what I got"というスローガンとも相まって、消費拡大に貢献しつつ国家と共に前進せよという持たざる者たちに対するメッセージの背後には、新自由主義の暴力性が隠蔽されており、『草の葉』のなかでも特にマニフェスト・ディスティニーのイデオロギーが強く表れた"Pioneers"の詩行がそれを腹話術的に暴いているという点は皮肉ながら興味深い。CM 制作陣の意図とは異なって、21 世紀のコンテクストのなかに置かれた『草の葉』のテクストは、あからさまなまでに消費主義的であるが故に逆に反消費主義的に振る舞うともいえるのだ。これらの CM が、いずれもホイットマンの反逆者的イメージを販売戦略の要として有効に商業利用しつつも、そこで引用される『草の葉』のテクストは、グローバル資本の内部にありそれを支えながら、同時にグローバル企業の宣伝意図を撹乱するような二重性も帯びており、その点においてネグリらのいうマルティチュード的な振る舞いをしているといえるだろう。

3. “I effuse my flesh in eddies,”リチャード･パワーズ『オルフェオ』と『草の葉』

現代作家の旗手の一人である Richard Powers は、“Song of Myself”を随所に引用した *Orfeo* (2014)において、『草の葉』における語り手の身体の微粒子性を細菌やウィルスのアナロジーとして利用しつつ、バイオテクノロジーによる生命倫理の問題や、9.11 以降のアメリカ社会における監視や抑圧の問題を扱っている。マルティチュードを包含するというホイットマンの身体の特異性の一つは、原子レベルにまで分解可能で、複数性、流動性、拡散性、不滅性を併せ持ち、一人称単数という限界を超えて外部に対して開かれている点にあるが、『オルフェオ』は、こうしたホイットマンの身体観を、バイオテクノロジーやバイオテロの主題と巧みに関連させつつ物語化している。たとえば、“The smallest sprout shows there is really no death,”や“I depart as air, I shake my white locks at the runaway sun, I effuse my flesh in eddies, and drift it in lacy jags.”という“Song of Myself”の一節を引用しつつパワーズは、バイオテクノロジーによって自己増殖する不滅の音楽を作ろうとした主人公 Peter Els の芸術的営為と、『草の葉』の不死性の主題を結びつけ、さらに音楽によって死を超越しようとしたオルフェウス神話へと接続する。また微粒子へと還元可能なホイットマンの身体観を示す上記の一節は、9.11 以降のアメリカ社会においてはバイオテロを想起させるものである。このことが示唆するのは、19 世紀アメリカの理想主義を歌ったホイットマンのテクストが、対テロ戦争によって犯罪的に響いてしまう程までにアメリカ社会が変質してしまったという事実だ。流転拡散するホイットマンの融通無碍な身体が、細菌のごとくアメリカ内部に潜んで国家転覆を謀る内なる敵=テロリストのアナロジーとしての意味を纏ってしまうという事実を『オルフェオ』はカリカチュアライズし、バイオテロリストと誤認され『草の葉』の詩行をツイートしつつ逃走を続けるエルズは、物語の結末では当局に銃撃されることが示唆される。このように『オルフェオ』は、ホイットマンの身体の微粒子性をバイオテクノロジーやバイオテロのモチーフへと結びつけ、またそのような逸脱的な身体を、国家が生政治的にボディポリティックへと組み込もうとする際に生じる監視や抑圧の問題を提示し、文学、音楽、遺伝子工学といった様々な領域を横断しつつ、対テロ戦争下における表現の自由という極めて現代的な問題を喚起している。

おわりに

三つの事例から 21 世紀におけるホイットマン受容を概観してきたが、様々な矛盾をはらんだ『草の葉』は、その雑多性故に多様な文脈で再解釈され続けており、激変する今日の世界情勢下においても有効な洞察を提供し続けているといえるだろう。ポピュリスト政治家や覇権主義的な振る舞いをする国家の台頭によって世界がますます混迷を深める今日、様々な矛盾や雑多性を包み込むホイットマン的な語り手として、Bob Dylan の 2020 年のシングル曲“I contain multitudes”における“I'll keep the path open, the path in my mind”という一節は、ホイットマンのオープンロードの包括性への賛意であることはあきらかだ。『草の葉』における語り手のマルティチュード的な有り様こそが、様々な分断を乗り越え断絶を架橋する可能性を秘めており、民主主義の危機が喧伝される現代にこそ、その意義を発揮しうるということをこの曲が雄弁に物語っている。

参考文献

Bennett, Jane. “Whitman’s Sympathies.” *Political Research Quarterly*, vol. 69, no. 3, 2016, pp. 607–20. *JSTOR*, http://www.jstor.org/stable/44018560. Accessed 3 June 2024.

Grünzweig, Walter. “Imperialism and Globalization”. *Walt Whitman in Context*. Edited by Joanna Levin and Edward Whitley. New York: Cambridge UP, 2018. pp.249-258.

Opitz, Thoren. “World Wide Walt: Making and Marketing Whitman’s Global Persona”. *The New Walt Whitman Studies*. Edited by Matt Cohen. Padstow, Cornwall: Cambridge UP, 2020. pp.68-82.

Powers, Richard. *Orfeo*. New York: W.W. Norton, 2014. 『オルフェオ』木原善彦訳、新潮社、2015 年。

Price, Kenneth M., and Stefan Schöberlein, eds. *The Oxford Handbook of Walt Whitman*. New York: Oxford UP, 2024.

Whitman, Walt. *Leaves of Grass and Other Writings*. Ed. Michael Moon. New York: Norton, 2002.

ヒース、ジョセフ、ポター、アンドルー 『反逆の神話---カウンターカルチャーはいかにして消費文化になったか』栗原百代訳、NTT 出版、2014 年。

ネグリ、アントニオ&ハート、マイケル『<帝国>』水嶋一憲監訳、以文社、2003 年。

---.『マルチチュード（上下）』水嶋一憲監訳、NHK 出版、2005 年。

---.『コモンウェルス（上下）』水嶋一憲監訳、NHK 出版、2012 年。